
復讐者はシャーマン！！

秋月秋代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐者はシャーマン！！

【Nコード】

N4469Z

【作者名】

秋月秋代

【あらすじ】

転生者はシャーマンの続きモノ。

闇ルートです。

更新は不定期です。
かなり遅くなる予定。

〈第零廻〉 プロローグ

三人称

崩れた家の前、そこに一人の男が居た。

男は目の前の光景が信じられず、崩れた門に目を向ける。
目を向けた先には『麻倉』と書かれた表札がある。

「親父、お袋、婆さん、爺さん、兄さん……」

男は崩れた家に入り、家族を探す。

しかし家には誰もおらず、おびただ夥しい血の跡しか残っていないかった。

彼が家に戻って来たのは、それなりの訳があった。

修行の旅に出て世界を知り、一人前のシャーマンになる事。

その修行が一段落着いて、久々に許婚達と連絡を取ろうとした所、
誰にも連絡が着かなかった。

不審に思いながらも、とりあえず実家に帰ろうとして、帰ってき
たらこの光景があったのだ。

「いったい何が……」

『旦那、様……』

「!!! 孫明!!!」

一人呆然としていた葉生の前に、かつて共に暮らしていた道潤の
キヨンシーだった孫明が現れた。

そして、孫明の口から衝撃的な事が語られた。

『管理局がお嬢様方を!!!』

「なん、だと……」

孫明の説明を受けて、葉生の中にある小さな芽は一気に成長して咲き誇った。

黒く、どす黒く、闇のような黒い花を……。

廻っていた歯車は動きを停めて、誰にも気付かれずに廻っていた歯車は、表へと踊り出た。

廻る、廻る。

憎悪と絶望の歯車が廻る。

男は愛と希望を失い、憎悪と絶望が与えられた。

男の名前は、麻倉葉生。
管理局に仇成^{あだな}す存在。

三人称

↳ 第一廻↳ 永遠の別れ（前書き）

特務部隊と違って短い……orz

く第一廻く 永遠の別れ

葉生視点

孫明から真相を聞き出してから、生前に大魔導師と言われてた霊を使って、オレは次元世界へと飛んだ。

そして目に着いた管理局の奴らを焼き殺したりして、着々と管理局が取り締まってる違法研究所へ近付いて行った。

『葉生……もう止めましょう。こんな事をして……なんになるんです……!』

「黙れ、アルトリア……邪魔をするなら、貴様も焼滅させるぞ」

『ッ!! 本、気で言ってるのですか?』

「貴様こそ、本気で言ってるのか……」

- - ボオシユウウウツ!!

『……………』

オレの怒りに触れてか、スピリット・オブ・ファイアがオーバーソウル状態で現れる。

『ッ……………』

己の不利を悟ったのか、アルトリアは顔を俯かせ何も言わなくな

った。

そんなアルトリアに、孫明が言った事を思い出させながら、スピリット・オブ・ファイアのオーバーソウルを解く。

「ジャン又達は朝昼晩問わず、男の慰みものに使われ……何処の誰とも知らぬ男の子を宿し産んでいる。そして、生まれた子を抱く事すら出来ずに離れ離れた。何故なら、生まれてきた子はシャーマンとしても、魔導師としても優秀なのを管理局の洗脳まが紛いな教育を受け、親父と爺さんの脳から、麻倉の秘術を取り出してシャーマンを育成！！ シャーマンとしても魔導師としても出来ない子は、己の母と知らずにジャン又達を………そんな奴らを許せるか！！」

『そ、それは……』

「………なんになるかって言ったな？」

『はい……』

「救いだよ。少なくともジャン又達は地獄から解放される。行くぞ」

『………はい』

止めていた足を動かして、オレ達は最初の研究所に到着した。中に入ると、そこは異界のような感覚を受けた。

「これは……」

『！！？！！？』

『ぐ……力が……』

「スピリット・オブ・ファイア、アルトリア……もしかして霊の力を封じる結界か!？」

「その通りさ……」

オレの言葉に応えたのは、入口を塞ぐように立っている管理局の局員だった。

「時空、管理局……」

目の前が赤く染まる。

頭が、局員を殺す事を考えるのが止まらない。

「この結界はな霊が強ければ強い程、霊の拘束力が強くなる代物だよ。お陰で良い思いをさせてもらってるよ」

…ブチッ!

アレの言葉を聞いた瞬間、オレの中の何かが切れて、気付いたらアレはモノ言わぬ屍となっていた。

「つまりは此処に居るのか、ゴミが良い思いをさせてる……オレの大切な人が……」

おそらく麻倉家を襲ったのも、この結界のお陰なのだろうな。と当たりを付けて、オレはさらに奥へと目指した。

研究所の奥は、想像を絶する程のモノだった。
まずは防衛機能。

これは霊の力を制限する結界しかなく、にわか圏境（李書文が使う気配遮断のかなり劣化van）で、監視カメラに映る事なく進めた。

まあその程度の事は、どうでも良かった。

だが見てしまった。

そして自分の愚かさに絶句した。

オレはどこか勘違いをしていたらしい。

ジャン又達も人間、相手も人間だからと……だが、現実はどうだ？
マリオンを母体N0.5と呼び、むさ苦しい男共に犯されてる。目は虚ろで何も映さず、ただ人形のように扱われていたのだ。

「……………」

「気持ち良い事には気持ち良いが、無反応ってのは楽しくねえなあ」

おいおい、無理矢理しといて楽しくないだと？

「だったら電流を流すか？ 良い声で鳴くぜ」

もう良いだろう？ これ以上苦痛を与えさせるなよ。

「頼む」

「了解」

・・・バチツ…バチチチチチチチチ！

「あああああああぎゃあああああああがあああッッ！！！！！」

・・・ブツンッ！！

マリオンの悲鳴を聞いて、オレの意識は闇の中へ堕ちた。

葉生視点

報告書

第三十二管理外世界で、シャーマン生産プロジェクトの第五研究所が崩壊。

母体N0.5、一名……………死亡。

研究員、三十名……………死亡。

出来損ない、三百名……………死亡。

護衛の管理局員、十五名……………死亡。

計、三百四十六名……………死亡。

崩壊した原因は不明。

しかし崩壊する前後、一人の人間を目撃したとの情報あり。

現在、その人物の特徴を重要参考人として捜査中。

以上。

報告書

葉生視点

目を覚ますと、なんの変哲もない洞窟に居た。腕の中には、冷たくなったマリオン。呼吸も鼓動も感じられない、誰が見てもわかる死。シャーマンのオレなら、蘇生は簡単だ。これが普通の死だったら…。

「……………遅くなった」

だけど……………

「ごめんな……………」

だけど、マリオンの死は……………

「遅くなってごめん……………」

魂が完全に消失して、蘇生出来ない死だった。

『……………』

マリオンを囲うように、スピリット・オブ・ファイアと黒く染まったアルトリアが霊体のまま現れる。

二人はマリオンの死を悲しむように、スピリット・オブ・ファイアは天を見上げ、黒いアルトリアは紅い涙を流した。

そして、研究所を破壊してから次の日。
オレはマリオンの遺体を、スピリット・オブ・ファイアの炎で骨
まで焼き尽くして、次の研究所へと探した。

葉生視点

く第一廻く 永遠の別れ（後書き）

次回から時間が飛んだりします。
もしかしたら飛ばないかも？

↳プロフィール↳ (前書き)

復讐者の方では、葉生をハオ

シャーマンキングのハオをシャーマンキングと表記します。

プロフィール

葉生と葉生の持霊

名前：ハオ・アサクラ

性別／年齢：男／17歳

出身地：日本・海鳴市

巫力数（前回値）：ソクテイフノウ（125億）

備考：管理局に家族を殺され、大切な人達を生産道具にしてる所を見て、人間に希望を持たなくなった葉生。

持霊1

名前：スピリット・オブ・ファイア【超究極形態】

性別／ランク：女／神

霊力数：ソクテイフノウ

媒介：酸素・憎悪・殺意

戦闘スタイル：完全焼滅

備考：ハオの憎悪に触れて、シャーマンキングから預かっていた五大神二体を瞬殺して喰らい成長した。さらに酸素が無くとも、ハオの憎悪か殺意によってオーバーソウルになる事が出来る。

持霊2

名前：アルトリア・ペンドラゴン

性別/ランク：女/神

霊力数：ソクテイフノウ

媒介：憎悪・殺意・酸素・エクスカリバー

戦闘スタイル：完全滅斬・完全焼滅

備考：ハオのストッパー的存在だったが、ハオの強大な憎悪によって魂レベルまで侵食され、闇へと堕ちた。スピリット・オブ・ファイアと同様、ハオの負の感情でオーバーソウルが可能となった。姿はセイバーオルタをさらに禍々しくした感じ……。

葉生と葉生の持霊

↳第二廻↳ 無限の欲望(前書き)

復讐者の方では、葉生をハオ

シャーマンキングのハオをシャーマンキングと表記します。

く第二廻く 無限の欲望

三人称

ハオが第五研究所を襲撃して一年が経った。
この一年の間、サチ、ミネ、潤、他のシャーマン達が捕われて
る研究所も襲撃して、数々の別れを経験した。
そして、管理局から広域次元犯罪者として指名手配が掛かった。

・・・ドオオンッ！

「「「ぎゃあああああああ！」「」「

・・・ボオシユウウウッ！！

「あああああがあああああついいいいいいい！」「

「がああああああああ！」「

・・・ズガアアアアアンッ！！

「「「...」「うああああああああああ！」「...」「

今、第二十七管理世界では、そのハオと管理局が戦って・・・

ハオの命令で、一瞬にして魂を焼き尽くすアルトリアとスピリット・オブ・ファイア。

それを確認したハオは、スツと右腕を垂直に上げて人差し指を伸ばす。

アルトリアもスピリット・オブ・ファイアも、ハオが指差した場所を見るがそこには誰も居ない。

「消せ……」

しかしハオは、指の先に居る何かを消せと言ってきた。

ならばそれに従うのが、ハオを主として付き従うアルトリアとスピリット・オブ・ファイアが行動するのは必然。

スピリット・オブ・ファイアの手には炎が上がり、黒き暴龍の口内に黒い光が漏れる。

そして、今まさに解放とうとした時、ソレは現れた。

「ちょ、ちょっと待って欲しいですわ！」

何もない空間から現れたのは、栗色の髪に丸眼鏡を掛けた女性と青髪の女性、極めつけは変態丸出しの服装。

「構わん消せ、目の毒だ。特に眼鏡は念入りにだ」

「な、何故!？」

「ライドインパルス……ッ!！」

『……………』

ジツとしてても攻撃されると感じたのか、青髪の女性は自身の能力を発動しようとした時、目の前に突然現れたスピリット・オブ・ファイアに思考が停止する。

「バキイインツ！！」

「ガッ！？」

「トーレお姉様！！」

『約束された（エクス）…』

「ヒイイツ」

そして黒き暴龍が、黒い波動砲を放とうとした時……

『アイアンメイデン・ジャンヌの居場所を知りたくないか？』

「！！ 待て……」

ハオの前に一つのモニターが現れ、今まで探してきた人物の名前を出された事により、ハオはアルトリアとスピリット・オブ・ファイアに待ったを掛けた。

『攻撃を止めてくれてありがとう』

「ジャンヌが居る場所を知ってるのか？」

『勿論……』

「言え」

『その前にこっちへ』

「言わないなら、あいつらを消す」

『やったら教えないよ』

「地道に探す」

『最後の一人を失いたいならするが良い』

睨み合う二人。

しかし、互いの思考は違った。

ハオは怒りに顔を歪め、モニター越しの男はニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべる。

そして男の言葉に、ジャンヌがそこに居る事も理解した。

「無事、なんだろうな？」

『記憶と精神と子宮以外は……。先に言っておくが、私の所に来た時の状態だ』

「……………わかった」

そう呟いて、ハオはオーバーソウルを解いた。

『ありがとう。クアットロ、トーレ…彼を丁寧に連れてきてくれ』

「はいはい（ボコツて気絶させても……）」

「オレに危害を加えない方がいい。スピリット・オブ・ファイアは、霊体のままでも炎を扱える。それに、こっちはジャンヌ達が死んでると割り切ってるんだ。お前らを殺してしまっても、あとはこいつを殺しに行くだけだ」

『クアットロ……彼に危害を与えずに連れてきてくれ』

「り、了解ですわあ……」

クアットロの返事を聞いて、男は『頼んだよ』と言ってモニターを閉じた。

そしてトーレとクアットロに挟まれるように、八才は第二十七管理世界から消えた。

三人称

八才視点

トーレとクアットロに連れられて、オレはあの男のアジトに来た。アジトの中には、丸いロボットがあったり、中に人が入ったカプセルがあったりと胸クソが悪くなるようなアジトだった。

「此処だ」

「ドクター？ 連れてきましたわ」

・・・シユンッ!

「ッ!」

扉が開いて、出迎えて来た人物に驚く。

銀の髪、赤紫色の瞳、そして隣に居る霊体のシヤマシユ。
間違いなく、アイアンメイデン・ジャンヌ……その人だった。

「ようこそ、お越し下さいました。どうぞ中へ」

「あ、ああ……」

しかしジャンヌは、オレに反応する様子もなく、淡々(たんたん)と対応するだけだった。

そして中に入ると、入れ替わるようにジャンヌが部屋から出て扉が閉まった。

「……………」

「気になるかい？」

「……………あいつは……………」

「察しの通り、キミの許婚だった子だよ。今ではXだ」
エックス

X……………シャーマンキングが居た頃の影響が出ているのか？

「そうか……………それで、オレに何の用だ？」

「共に時空管理局を見返そうと思ってね」

「……………」

「キミが協力してくれるなら、彼女の傍につけるが……………どうする？」

……………悪くない申し出だな。

だが、オレは……………

「わかった……………協力はしてやる。だが、あいつをオレに近付けな」

もし、あいつの記憶が蘇りでもしたら、オレは復讐を忘れてしま

う。いや……………記憶が無くとも、一緒に居るだけでオレが満足してしま

う。それだけは、何としても阻止しないとイケない。でないと、マリオン達に申し訳が立たん。

「私はそれで良いが……………良いのかい？」

「ああ……………」

「わかった……………」

こうしてオレの復讐に、協力者が出来た。

〜第三廻〜 大陰陽師VS戦闘機人(前書き)

復讐者の方では、葉生をハオ

シャーマンキングのハオをシャーマンキングと表記します。

今回は描写がドギツイかもです。

〜第三回〜 大陰陽師VS戦闘機人

八才視点

ジェイル・スカリエッティと手を組んで、数日が過ぎた。

今日もオレは、スカリエッティの情報で得た違法研究所の破壊に
来たのだが……

「……………また倒壊してる」

オレの目の前に広がる光景は、所々に煙が上がっている研究所だ
った。

実を言うと此処のところ、こういう事が多い。

何故、倒壊してるのか……最初は各世界の危険生物に襲われたと
思っていたが、所々に魔力を感じ、さらには破壊された壁から人間
以下の大きさしか通る事が出来ない事から、魔導師である事がわか
った。

「いったい誰の仕業なんだか……………」

『やあ……………復讐は進んでるかい?』

オレが倒壊させた奴を特定出来るモノを探そうとした時、突然目
の前にモニターが現れた。

「スカリエッティか……………また倒壊していた。 次の研究所の場所を
教える」

『ふむ、またかい？』

オレの言葉を聞いて、考えるような仕草をする。
しかしオレの勘が、この惨状を作った人物をスカリエッティは知
っているくわと囁く。

『ん、まあすでに倒壊してるなら都合が良い。一度戻ってきて
もらいたい。うちの娘がキミの力に興味を持ってね』

「……………つまり？」

『キミと模擬戦させようかと』

スカリエッティの言葉を聞いて、耳がおかしくなったかと疑う。
オレと戦えば、塵一つ残らずに焼滅する。

それはスカリエッティにも理解してるだろうし、ナンバーズの中
でも戦闘に関して最強のトーレだつて理解してる。
では、スカリエッティが望む戦いは……………

「ああ、オレ自身の実力か」

『そういう事だ。ああ……………キミが戦ってる間に、次の研究所の場
所を見つけておくよ』

「わかった」

『それじゃあ、待ってるよ』

…ブツンッ！

モニターが閉じ、オレは戻ろうと踵かかとを返した時、足元に赤い革の切れ端を見つけソレを拾う。

「これは……ベルトの切れ端？」

- - パアア…

しばらく眺めてると、赤いベルトの切れ端は金色の魔力粒子になつて消えた。

赤いベルト、金色の魔力。

この二つを連想させる人物は、オレが知る限り一人しか居ない。しかしあいつは管理局で、此処は非公開でも管理局の研究所。それにこの広い次元世界で、証拠があれだけじゃ確証は持てない。それだけ考えて今までの考察を破棄し、オレは小型転移装置でスカリエッティのアジトへ帰還した。

ハ才視点

三人称

ハ才がスカリエッティのアジトに帰還すると、ハ才はウーノによつて訓練室に案内された。

訓練室には、トーレ、チンク、Xエックスの三人が待機していた。

「ドクターから話は聞いてると思うけど、この模擬戦で貴方は霊の

「力を使わずに戦う事」

「わかった」

ウーノの再確認するような説明を受けて、ハオは返事を返すだけだった。

「それじゃあ、戦う娘を……」

「三人まとめて来い。その方が手っ取り早い」

「「「「！！！！」」」」

「ッ！！ 正気！？」

ハオの言葉にウーノ、トーレ、チンク、Xが反応し、ウーノはハオの正気を疑う。

それもそのはず、ウーノ達はジェイル・スカリエツティの研究の中で最高傑作だ。

そしてハオが戦うのは、ストライカー級の魔導師を倒したチンクや戦闘機人の中で最強のトーレが居る。さらには、対シャーマン用戦闘機人のX。

その三人を相手に、スピリット・オブ・ファイア、アルトリアを使わずに勝つ事は不可能に近い。

それをハオは手っ取り早いという理由から、三人まとめてと言った。

「霊の強さだけが、シャーマンの実力だと思ってもらっては困る。

そのこの三人も、よく聞け……この模擬戦……いや、これからの戦いで油断や手加減を試してみる……詫びる暇もなく消す」

……オレの目的は、時空管理局を潰す事だからな……。

そう言つて、八才は静かに構えた。

その構えは、ただ片足を下げただけの半身状態^{はんみ}。

隙があるようで隙がない、そんな感覚に陥る程の威圧感が、三人にのしかかった。

「コッッ！」「コッ」

「来い……」

……ダッ！

八才の合図と共に、三人はバラバラに散った。

しかし、これはこれで正解だったかもしれない。

これが愚直に真つ直ぐ三人共が、八才の所へ向かったのであれば、一瞬にして勝負が着き……本当に命を落としていただろう。

だが、バラバラに散つてもすぐに行動に移さなければいけない。

……ブシュッ！！

「ガッ！？」

「……！？」

突如、室内に肉を貫く音が響き渡る。

トーレとXは、すぐに何が起きたか音の発生源を見ると、ステインガーを持ったチンクの腹に八才の手が生えていた。

当然、八才は先ほどまで居た場所におらず、チンクの背後に立つ

ていた。

「脆い」

- - ジュルツ！

チンクの身体から手を抜いて腕を振ると、腕に付着した血は飛び散って床や壁に付着する。

「きいさああああまあああああああああああ！！」

ソレを見ていたトーレはインヒューレントスキルISを起動し、高速移動能力を持って八才に肉薄して、インパルスブレードで切り付ける寸前、八才はトーレの腕を掴んで（インパルスブレードの刃が届かない所）、そのままトーレが来る場所に肘を置く。

そして……

- - ゴスツ！！

「ガ……ッ！！」

トーレは急停止出来ずに、心臓部に八才の肘を埋めた。

「遅い」

トーレの意識を刈り取った事を確認して、すぐにその場を離れると……先ほどまで居た場所に四本の鎖が通過した。

鎖が集まっている方を向くと、そこにはシャマシユをオーバーソウルにしたXの姿があった。

「オーバーソウルはオーバーソウルでしか」

「破壊出来ない……だろ。知ってるさ」

「なら貴方に勝ち目は……」

「オーバーソウル相手になら、勝ち目は無いが相手は貴様だ。十分に勝機は……ある！」

十

――ズガアアアアアンツ！！

ハオは言い終わると、消えるような動きで走り出す。

だがそれは常人にとってであり、戦闘機人のXには見える動きだったが、シヤマシユに指示を出して鎖で拘束しようにも、鎖が捕らえようとする時には、ハオの姿を見失う。

まるで、空に浮かぶ雲を捕まえようとする子供みたいに……。

まるで、煙を掴もうとする子供みたいに……。

そう、Xは子供のように遊ばされてる事に気付く。

それほどまでに、彼との実力差があるのかと……Xはようやく気付いた。

「弱い」

――ゾクッ！

自分の後ろから聞こえた声に、Xは自身の死をイメージした。首を落とされて、死ぬイメージ。

背中から心臓を貫かれ、死ぬイメージ。

チンクのように、お腹を貫かれ死ぬイメージ。

もしくは苦しませるように、首を絞めて殺す？ それか頭を握り

潰され殺す？ いろいろな死をイメージした。

「ちっせえな……」

・・グロンツ！ ゴキゴキンツ！！

Xの首は回転した。

「……………終わったぞ」

「まさか……………本当に……………」

ウーノは、今見てるこの状況が信じられなかった。

一人の人間に戦闘機人が三人もやられ、ドクターの話では……………Xはハオの許婚だったと聞いた。

なのに躊躇無く、Xの首を折ったハオに恐怖した。

『ご苦労様。 とりあえず、彼女達の蘇生を頼むよ』

「研究所の場所は？」

『蘇生が先だ』

「チツ……………」

スカリエツティは怒気を孕んだ声で、ハオに蘇生を指示する。

そしてソレに舌打ちするハオを見て、スカリエツティは組んではいけない存在と組んだのではないかと、頭を抱えた。

ハオの悲しみは枯れ、喜びも沸かず、愛も忘れ、楽しみすらしない。

憎怒苦殺。

憎悪を持って、管理局の怒りを、心の片隅に疼く痛みに苦しみながらも、敵を抹殺する……。

ハオの復讐は、まだ始まったばかり……。

三人称

〜第三回〜 大陰陽師VS戦闘機人（後書き）

復讐マシンと化したハオ。

折角得た協力者、スカリエッツィとの溝。

ハオの復讐に終わりはあるのか？

復讐のあとに救いはあるのか？

物語は進むにつれて闇を増す。

そんな中、一筋の雷が登場する！！

「時空管理局執務官、フェイト・マクレディッツ！！ 非人道的行為及び違法研究による人体実験……その他諸々の罪により逮捕します！！ 覚悟しろ、管理局のクス共！！」

これ誰！？

〔第四廻〕 執務官（前書き）

復讐者の方では、葉生をハオ
シャーマンキングのハオをシャーマンキングと表記します。

「第四廻」 執務官

三人称

第三管理外世界のとある研究所。
そこに、一人の女性が現れた。

「……………」

「おっと、止まれ」

「……………通して下さい」

「そうはいかん。何の用なのか聞かないとな……………」

研究所の入口を警備していた管理局の制服を着た男性は、中に入ろうとする女性の前に立ちはだかり、デバイスを構えた。

「……………仲間狩りの執務官さん」

「私の事を知ってるなら、わかってるでしょ？」

瞬間、女性は自身のデバイスを振り、目の前の男性を吹き飛ばした。

「…バキイイイイッ！！」

「グハッ!？」

「时空管理局執務官、フェイト・マクレディッツ……………違法研究所に居る職員達の逮捕に来た!!!」

「ぐ、わかつてるのか？ 此処は管理局の……………」

「ああ…御心配なく、ミゼット・クローベル本局統幕議長に掛け合つて、逮捕状を発行してもらいましたので……………」

「…………ツ!!」

男性は恐怖した。

フェイトの行動力に、その調査能力に…………。

そして同時に、自分に未来が無い事も悟った。

「恨むのなら、自分には関係ないだろうと思っていた自分を恨んで下さい」

「ぐっ……………」

自分には関係ない。

確かに彼は、一人の執務官によって、次々と逮捕される違法研究所の話聞いてる。

というよりも、違法研究所の護衛に就いてる局員達の間では有名な話だ。

提出されるのは何も反論出来ない、確たる証拠品の数々。

少しの違和感から、大元へと到達する異常なまでの調査能力。

法と共にある執務官の話を…………。

男性は最後の足掻きと、中に居る連中に知らせる……………

・カチッ！

「え、あれ？」

・カチッ、カチッ、カチッ、カチッ

が、いくら警報スイッチを押しても、警報が鳴らなかった。

「警報装置ならショートさせました」

「そん……………なあ……………」

フェイトの言葉に男性は膝を着いて、自身の敗北を知った。

そのあと、フェイトは男性にバインドを掛けて、研究所の中へと向かった。

男性はソレを見る事しか出来ず、そして一瞬にして男性が守ってきた研究所は崩壊した。

そして思う。

これだけ管理局の利益を潰してるのに、何故彼女は消されないのかと……………。

その疑問は、一緒に捕まった上司によって解けた。

「各次元世界の人気者で、魔導師ランクは空戦S+、魔力変換資質持ちで、少しの違和感、不自然さから調査して逮捕に至る調査能力……………これほどの人材は中々居ない。だから管理局は消せないのさ……………」

そう、ただの人気者なら、時間は掛かるが替えは効く。

ただ魔導師ランクが高いだけなら、高町なのは、八神はやてが居

る。

ただ調査能力が高いだけなら、アコース調査官が居る。だが、それら全てを持つ者は……早々居ない。

故に管理局は、自身を蝕む毒とわかってても飲み込むしかないのだ。

「あ、聞いた話によると、最高評議会すら敵に回してるって話らしい」

男性は思う。

あの執務官なら、管理局を変えるんじゃないかと……。

三人称

フェイト視点

第三管理外世界の違法研究所の役員達を逮捕して、裁判が始まるまで休みをもらった私は、母さんと姉、そして彼が待つ家に帰る事にした。

「ふう……」

そして帰宅途中から地上本部の建物が視界に入り、いろいろな事を考える。

管理局に入った理由。

管理局という安全地帯から汚職に手をつける人達。

いまだ増え続ける次元犯罪者。

次元犯罪者になった葉生。

葉生が次元犯罪者になった理由。

記憶を失った彼。
様々な事が頭を通り過ぎる。

管理局がした事は許せない。

葉生が復讐したくなる気持ちもわかる。

でも、いやだからこそ……一緒に管理局を変えて行きたかった。

もしかしたら葉生が復讐に走る瞬間、私が葉生の近くに居たら変わっていただろうか？ 共に変えて行こうと……。

「……………今でもそう思う事があるんだよ？ 葉生！！」

『Get Set』

バルディッシュをセットアップして振り返ると、そこにはどこかの民族衣装を身に纏った葉生が居た。

「それは一つの可能性に過ぎん。お前が気にするのは筋違いだ」

「それでも……くつ、時空管理局執務官、フェイト・マクレディッシュ……広域次元犯罪者ハオ・アサクラと接触……これよりクラナガンの空域で捕縛の為戦闘に入ります。至急、民間人の避難を！！」

『り、了解しました！！』

「来い、仲間狩りと恐れられし、漆黒の執務官！！」

- - ダッ！

熱風で上空へ上がった葉生を追い掛けるべく、私は空へと飛んだ。

『これより首都クラナガンで、次元犯罪者との戦闘が行われます。住民の皆さんは局員の指示に従い、速やかに避難してください。繰り返します。――』

フェイト視点

三人称

ミッドチルダ・首都クラナガンの遙か上空。
そこに、二つの影があった。

一人は、巨大な大剣を持ち、漆黒のバリアジャケットを纏った執務官。

名はフェイト・マクレディツ。

もう一人は、これまた巨大で黒い大剣を持ち、熱風によって浮いてる次元犯罪者。

名はハオ・アサクラ。

執務官と犯罪者。

犯罪者を捕らえる執務官。

執務官に追われる犯罪者。

この二つは、当然相反する存在。

しかしそれが幼なじみなら？ 犯罪者となった幼なじみが、昔、自身の家族を救ってくれた存在なら？ あなたは執務官として、犯罪者を捕まえる事が出来ますか？

アンサー
A、わからない。

A、全ての事から耐え切れない。

多くの人間は、そう答えるだろう。
しかし、フェイト・マクレディッツの答えは違う。

A、捕まえる。 救ってくれたからこそ！ 私は間違ってるよと、
その人の目を覚まさせる！！

「それが……………私の恩返しだから」

「ならば、オレは戦おう。 目的の為に……………」

二つの影は……………

・ ・ ジャキンッ

二人は……………

・ ・ カチャッ

…………… 激突する。

「ハアアアアアアアアアアアッ！！」

此処は、首都クラナガンの地下シェルター。
そこに一組の家族が、クラナガンの上空で戦ってるフェイトとハ

才を心配していた。

「フェイト……大丈夫かなあ……（はおも……）」

「きっと大丈夫よ……きっと……」

フェイトによく似た少女は、今戦っているであろうフェイトの心配をしながら、シエルターの出入口を見て咳くように言う。

それを聞いた母親であろう人物は、娘の頭を撫でながら答える。

彼女達こそ、フェイトの家族であり、今フェイトが戦ってる次元犯罪者が救った人達なのだ。

「……………葉生」

「何か思い出せそ？ レン」

「いや……だが………すまない」

「良いのよ。 ゆっくり思い出していけば……」

そして此処にもう一人、ハオを知る者が居た。

しかしその者は、記憶を失っていた。

そうシャーマンの力と共に……。

場所は変わり、クラナガン上空。

「ガキイイイインツ！！ ギイイイイインツ！！」

金色の魔力刃と黒いオーバーソウルが、ぶつかり合う。

「くっ……結果は起動してるはずなのに……」

「屑共が開発した結界なんぞに、オレを制限出来ると思うな……！」

「フェイト執務官！ 援護に来ました……！」

「ッ！！ こつちに来ては……」

「ゴウウウツ！！」

「……ぎゃあああああああ……！！」「……」

フェイトの援護に来た局員は、フェイトが止める間もなく炎によって、その身を焼き尽くした。

フェイトはハオへと視線を向けると、ハオの後ろに無視出来ない程の赤い巨人が居た。

「ッ！（以前見た時よりも大きい）」

「……シュンツ！」

「……バルディッシュ！」

『ソニックムーブ』

「……ブンツ！」

ハオとスピリット・オブ・ファイアが突然消えると、フェイトの前から桃色の魔力砲が見え、すぐさまその場を離れた。

そしてしばらくして、ハオとフェイトが居た所に巨大な桃色の砲撃が通過して、地上のビルをいくつか崩壊させた。

「何処のバカだ？ オレ達が地上に被害を与えないように、あえて空で戦ってやったのに……」

「ムッ！ 犯罪しよ」

「同感だ」

「フェイトちゃんまで……」

ハオの言葉に、カチンと来たのか砲撃手は言い返そうとするも、フェイトの肯定の言葉に落ち込む砲撃手であった。だが戦闘中にそんな事をすれば……

……ゴウウウッ！！

「ッー！」

『アクセルフィン』

砲撃手・高町なのはは、自身に向かって放たれた炎を察知し、足に生やしてる桃色の羽根を伸ばし、緊急回避を行い難を逃れる。

「真面目にやって」

「ま、真面目だよ!!」

フェイトの言葉に即座にツッコミを入れるのはだが、それも次元犯罪者の前では不真面目の範囲だろう。

その証拠にフェイトはなのはのツッコミを無視して、ハオとスピリット・オブ・ファイアを凝視していた。

「葉生くん……」

なのはは悲しみに満ちた目で、ハオを見る。

それは「何故こんな事を……」というような目だった。

「オレも管理局が全員知ってるとは思ってないが、説明する気も……」

「……毛頭ない!! スピリット……」

『待ちたまえ……』

「「「!!」」」

ハオがスピリット・オブ・ファイアに命令しようとした時、ハオの前にモニターが現れた。

そのモニターに映ってた男を見て、フェイトとハオは顔を歪める。

「ジェイル……」

「スカリエツティ……」

「ジェイル・スカリエツティって……あの……」

『キミが管理局を屠るのは構わないんだが、そのプロジェクトF

の生き残りには興味がある』

「プロジェクト……F?」

なのは聞き慣れない言葉に首を傾げるが、フェイトは今までに見せた事がない鬼のような形相で、ジェイル・スカリエツィを睨みつける。

「で?」

『連れてきて欲しい』

「……………わかった」

『頼んだよ』

ハオの色良い返事に満足したのか、ジェイル・スカリエツィはモニターを閉じて、場は元の戦場へと戻った。

「そついうわけだ。お前の身柄を確保する」

「……………ッ」

スピリット・オブ・ファイアが構えを取ると、フェイトは顔を歪ませてこれから起きる戦闘予測を立てるが……

「フェイトちゃんを次元犯罪者の所へなんか連れて行かせない!!」

「なの……は……」

フェイトを守るように、ハオとフェイトの間に立つのは。
しかし……

「スピリット・オブ・ファイアを捉えきれないお前に……何が出来る」

「「……！」」

スピリット・オブ・ファイアに立ち向かおうとした瞬間、スピリット・オブ・ファイアは消えて、いつの間にかなのはとフェイトの後ろからハオの声が響いた。

……バシユウウウウウウウツッ!!

「きゃああああああああ……」

「くっくっくっくっくっくっ!!」

突然大きな蒸発音が発生した瞬間、フェイトとなのはは何者かによつて危機を脱した。

そして取り残されたハオは、スピリット・オブ・ファイアによつて捕獲された、スピリット・オブ・レインに目を向ける。

『……………』

「……………オレに気付かれずに……まあいいか。…………喰つてもいいぞ」

……ガバツ!! バクツ! バキツボキツゴキツゴキュツ!!

ハオの許可を貰ったスピリット・オブ・ファイアは、口を開けて頭からスピリット・オブ・レインを貪った。

「……………主戦力が居なくなつて撤退したか……………帰るぞ」

辺りを見渡し、誰も居ない事を確認してハオは転移した。

戦闘空域からだいぶ離れた場所。

そこに、フェイト達を助けた巨人が居た。

「ありがとう……………スピリット・オブ・サンダー……………」

「……………」

フェイトが礼を言うと、スピリット・オブ・サンダーは頷き、姿を消した。

なのはは何がなんだかわからず、先ほどまで自分が居た場所を眺めていた。

「……………なのは」

「え、何？」

そんななのはを見て、フェイトは今まで黙っていた事を話す。

管理局の事、ハオが次元犯罪者になつた理由、そしてプロジェクト

TFの事も……………。

三人称

〈第五廻〉 管理局の闇（前書き）

復讐者の方では、葉生をハオ

シャーマンキングのハオをシャーマンキングと表記します。

〈第五回〉 管理局の闇

フェイト視点

地上本部へ状況を説明したあと、私はなのとはやて達を家に呼んだ。

念のため、シエルターから帰ってきた蓮に、部屋から出ないように言っている。

「それじゃあ、フェイトちゃん教えて？」

「まず最初に管理局は完全な正義じゃない。裏では非人道的な事をしてるんだ」

母さんに罪を着せた事、闇の書の事件の時に守護騎士達を嚇けしかけて、闇の書を完成させてはやてごと強力な氷結魔法で封印しようとした事、そして管理局が地球に居るシャーマンを捕縛して非人道的な行動をしてる事を話した。

「そん、な……じゃあ、葉生くんの家族は……」

「家の中を調査した時、夥おびただしい血の跡はあったけど……死体とかは発見出来なかった」

「蓮くん……蓮くんや他のみんなはどうなったん!？」

「……違法研究をしてる研究所に連れ込まれ、女性としての最低な扱いを受けてた。蓮は抵抗した為に、直射弾の集中放火を

受けて命を落とした」

本当は生きてる。

でも此処で言ってしまったら、また蓮が狙われる。

二人を信用してないわけじゃないけど、情報が何処で漏れるかわからないから……。

葉生という脅威が現れた……今、管理局も葉生に対抗する存在を、少しでも多く手に入れておきたいだろうし……。

「なん……やて……」

「ちよつと待て！ おかしいじゃねえか！！ あいつらのオーバーソウルは……」

「靈的力を封じて、オーバーソウルを使えなくした。以前管理局が局員のデバイスをフルメンテナンスした時に、管理局が勝手に組み込んだんだ」

でも葉生には、それが効果無かった。

ジェイル・スカリエツティに無効化させる装置をもらったのか、それとも葉生には効かなかったのかわからないけど……。

その考えをなのはが問い掛けて来る前に言うと、なのはは肩を落として落ち込み始めた。

「それでも解せんな。 奴らは私達を無力化する程の実力者だ」

「そ、そうだ！ シグナムが魔力強化無しにやられたんだぞ！？ あのシグナムが……！」

「いや……ヴィータ……そう言われると……辛いというか」

「奇襲、集団でリンチ、シャーマンと違って魔法が使える。他に質問は？」

シグナムの質問に答えて、他に質問がないか聞くが、みんなは顔を俯かせたままとなった。

「それじゃあ、次に……」

「まだ……あるん？」

「もう入んねえよ……」

「これで最後だから……プロジェクトF……私の事だ」

「……」

プロジェクトFの言葉を聞いて、なのはが少し反応をした。

さあ、話そう。

私の出世の秘密。

そして、私達テストロッサ家が救われた物語を……。

フェイト視点

八才視点

先ほど捕食したスピリット・オブ・ファイアの報告を受けて、あのスピリット・オブ・レインは五大精霊だとわかった。

まあこれで属性変換せずとも、水気への耐性が出来たんだ。よしとしよう。

そんな事を考えながら、スカリエツティが籠ってる部屋に入る。

「まさかキミが取り逃がすとはね。手心でも加えたのかい？」

「予想外な邪魔者が入ってな……それだけだ」

「そうか……しかしキミ達シャーマンは、医者泣かせだね。どんな傷を負ってもイメージだけで完治。死んでも蘇生出来る……医者だけじゃない、不老不死の研究をしてる科学者も形無しだよ」

「ちっせえな……そんなちっせえ事を気にする程、お前はちっせえのか？」

「いや……ただの嫉妬だよ。今は失われし都・アルハザードの科学者のクローンである私ですら知らない、死者蘇生の秘術を持つシャーマンにね」

「………そんな事より、研究所の場所を教えろ」

「わかった」

オレの言葉に肩を竦めて、スカリエツティはオレの前にモニターを出す。

そこには、三十数件の研究所が載っていた。

「ちなみにまだまだある」

「……………生まれてきた使えないシャーマンを無理矢理成長させてつて事か」

「そこまで考えが着くのか……………とんでもない推理力だね」

「推理力なんてもんじゃない。考えれば普通にわかるだろう」

「そうかい……………あ、ちょっと待った」

スカリエッツィに背を向け部屋を出ていこうとしたら、何故かオレを呼び止める。

仕方なしに止まって振り返ると、スカリエッツィはニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべながら、大画面のモニターに三人と一体の人物を映し出した。

「男の名前はゼスト・グランガイツ、紫色の髪の女の子の名前は、ルーテシア・アルピーノ、赤髪の妖精のような女の子は、アギト、昆虫を人型にした感じの生物は、ガリユー……………研究所を破壊し終えたら、しばらくは彼らと行動してくれ。彼らには話しておく」

「……………わかった」

どうやら人形へやった事に、相当頭に来てるらしいな。

それと他の人形の逆鱗にも触れたか。

まあオレには関係ないか……………。

オレは管理局を見返すのではなく、管理局に復讐したいだけだからな。

八才視点

フェイト視点

プロジェクトFの事を話し終わると、窓の外は暗く、もう夜だということが見てわかった。

いまだ呆然としてるみんなをそのままにして、私は母さんに蓮の様子を念話で聞いた。

(今はアリシアとアルフも、一緒に寝てるわ)

(良いなあ……私も蓮と寝たい)

(なら今夜はお母さんと寝る?)

(うん!)

母さんと寝れるなんて、何時以来だろう。

なんて事を考えながら、私は蓮と葉生の事を考える。

蓮を見つけたのは、本当に偶然。

私が違法研究をしてる研究所に、突貫した時に見つけた。

その時には、すでに記憶が無くなっており、洗脳される一歩手前でなんとか助け出せた。

その時に、頭についてる機械を無理に外したのが悪かったのか、シャーマンの力まで失ってしまった。

そして葉生も……後悔ばかりだな。

しばらくしてなのは達は、帰る事になった。

まだ顔が青ざめてる事から、ショックはまだ抜けてないみたいだ
けど……。

「……………それじゃあ、また」

「うん」

「……………フェイトちゃん……………私の部隊に来る気はあらへん？」

「ごめんね、はやく……………私は一カ所に留まってる暇はないんだ」

「そうか……………」

「マクレディッツ……………最後に一つ聞かせてくれ」

「何？」

「管理局にシャーマンの存在を教えた奴は誰だ？」

「…………………………クロノの報告によつてだよ」

「…………………………」

「でもクロノは、こんな事になるとは思ってたみたい。そ

して今は私と一緒に、捕われたシャーマン達を助けるべく動いてる」

「そうか……」

私の言葉にシグナムは何も言わなくなり、なのは達と一緒に帰っていった。

みんなが見えなくなるまで見送ると、私の後ろに見知った気配が現れた。

「……………行くの？」

「ああ……………」

「記憶もないのに？」

「……………それでもだ。葉生……………聞き覚えがある。もしかしたら、俺の記憶を取り戻す鍵になる」

「そう……………か」

「今まで守ってくれてありがとう」

…フウウウウウウー……………ッ!!

「蓮ッ!!」

一陣の風が吹き荒れ、私が後ろを見る頃には蓮の姿は何処にも無かった。

フェイト視点

〈英霊の詩〉 英霊達の選択編（前書き）

転生者はシャーマンで、葉生と英霊達が一時期離れた時の話。

復讐者の方では、葉生をハオ

シャーマンキングのハオをシャーマンキングと表記します。

〈英霊の詩〉 英霊達の選択編

シャーマンキング視点

葉生を蘇生させて、僕はアルトリア・ペンドラゴン、クー・フーリン、ギルガメッシュユに向かい合う。

《キミ達にはある選択をしてもらおう》

『選択？』

《そう……。近い将来、あいつは闇に堕ちる可能性がある》

きっかけは、リンディの心の声。

しかしそれだけで闇に堕ちれば、あいつはとっくに心が折れて死んでる。

だがこれから悪霊達に魂を侵され、さらに数年後に家族や許婚達を失う。

ただ失うだけじゃない。

管理局によって、脳と身体を利用される。

その事を彼らに話して、選択肢を与える。

《1、今まで通り葉生と過ごすか。 2、葉生と別れグレート・スピリッツ内に戻るかだ》

『ハッ！ 例えあいつが堕ちようが、俺達があいつを戻せば良いだろうが』

《無理だね。 キミ達は葉生の怒りと悲しみに触れて、自我を失い葉生に従うモノになる》

そう、僕が乙破千代おほちぢよにやったように……いや、僕がやったのは殺しだから若干違うけど、まあ似たようなモノかな。

『この我オレを従えさせる？ フンッ！ 笑わせるな！！ この我オレが……』

《葉生の実力は、シャーマンキングである僕と大差がない。 何故なら、彼は地上に居るシャーマンの中で最強だからさ》

『でもよ……』

やれやれ、流石は英雄と言った所だね。
我が強いというか、強情というか……

『私は……私は葉生と共に居ます』

そう言ったのは、ブリテンの王……アルトリアだった。

《正気かい？》

『貴方がなんと言おうと、私は葉生の怒りと悲しみに耐えてみせる！！ そして葉生を元に戻します……！！』

そう言ってアルトリアの眼に強い意志が宿り、もう梃子てこでも動かないと言った感じだ。

それに呼応するかのように、クー・フリーン、ギルガメッシュもアルトリアと同じ眼をする。

頭が痛い。

《わかった。だが保険としてクー・フリーンとギルガメッシュは待機》

『は？』

『なんでだよ』

《キミ達にまで染まったら、手が付けられないからさ。アルトリアが耐えて、葉生を戻してくれたら、文句はないよ》

『チツ……わああったよ』

『チツ……』

『必ずや……』

クー・フリーンとギルガメッシュは不満げに了承し、アルトリアはクー達とは違って満足げに地上へ降りて行った。

そして運命の時。

アルトリアは闇に染まった。

《何が必ずや……だ！！だから言ったのにあのアホ英霊！！》

『グハッ!』

『ガハッ!?!』

《立てクー・フリーン、ギルガメッシュ……もっと僕の八つ当たり
に付き合え!》

と、グレート・スピリッツをオーバーソウル化して、僕は残った
保険二体をボッコボコにしてる。

当然は消滅寸前まで、八つ当たりを受けて貰おう。
そしてアルトリアには、完全に消滅させる。

《消す! 奴は絶対消す!》

『ア、アルトリアの野郎……』

『^{オレ}我が行けば、このような事に……』

《ぶっちゃけお前らが居ても、あぁなつてたがな……》

『……………』

僕の言葉に、押し黙るクー・フリーンとギルガメッシュ。

そして地上の様子を見て、ため息を一つ。

《保険として二体の五大神はスピリット・オブ・ファイアに食べら
れ、蓮は記憶喪失とシャーマンとしての能力を失って、残りの五大
神は期待出来ない……しょうがない》

僕はすぐに五大精霊を呼び、地上に居るアリシアの所へ行くよう命じた。

蓮の記憶とシャーマンとしての能力が回復するまで、足止めだけでもしてくれれば良いんだけど。

オラクルベルを操作して葉生の力を計るも、オラクルベルは葉生の巫力とスピリット・オブ・ファイアの霊力を測定しない。壊れたのかと考えるが、思考をやめた。

オラクルベルで計れる測定容量を、超えたのだと理解したからだ。

《……はあ、でもまあ気持ちはわからんでもない。僕も管理局がやってる事は許せないからね》

……彼なら復讐に走った僕を、永遠に支えたかな……。
まあ……それは昔の話だけど……。

シャーマンキング視点

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4469z/>

復讐者はシャーマン！！

2011年12月24日05時50分発行